

校長会広報212号

発行・一般財団法人 宮崎県校長会館
編集・宮崎県校長会
広報委員会



“目に見えない敵”との戦い

都城市教育委員会 教育長 児玉晴男

いま私たちは、これまでに経験したことのないような、“目に見えない敵”に直面している。新型コロナウイルス感染。外出を控えるように呼び掛けられ、多くの学校で休校処置が行われた。

こんな時、ウイルス感染が急速に広がったイタリア・ミラノで、ある校長先生が生徒に送ったメッセージが、世界の人々に響き、感動を呼んだ。ある校長とは、アレッサンドロ・ヴォルタ高校のドメニコ・スキラーチェ校長先生である。

メッセージで引用されたのは、19世紀の作家アレッサンドロ・マンゾーニ（1785-1873）が書いた歴史長編小説『いいなづけ』で、イタリアの中学校教科書に出てくる有名な小説であった。

1630年、ミラノで流行したペストによって町が打撃を受けた様子がつづられており、今、この世の中で起こっている出来事を重ね合わせずにはいられない。

外国人やよそ者を危険だと思い込む、役所同士で激しく対立する、最初の感染者、いわゆる“ゼロ号患者”を突き止めようと躍起になる、専門家たちの意見を軽視する。さらにウイルスを広めた人たちの追跡、制御のきかない噂話やデマ、根拠のない治療、生活必需品の奪い合い、そうする間に危険にさらされていく人々の健康…、これらの様子が小説に描かれている。

スキラーチェ校長先生は、これらを引用して生徒に向かって次のように呼びかけている。

このたびは親愛なる皆さんに、『学校閉鎖』をお伝えしなければなりません。学校というのは、決まった時期に行事が行われることで、時の移り変わりを感じ、市民生活がきちんと送られていることを認識する場所です。（中略）そして、皆さんには、次のようにお伝えしたいと思います。

冷静さを保ち、群集心理に惑わされないください。

必要な予防策をとって、いつもどおりの生活を続けてください。

休校中の時間を生かして、散歩をし、良書を読んでください。（中略）

“見えない敵”がいたるところにいて、いつ襲わ

れるかわからないという恐怖にとらわれた時、私たちは本能的に、同じ人間をむやみに脅威に感じ、攻撃の対象とを感じるものです。しかし、14世紀や17世紀に伝染病が蔓延した時代よりも、現代医学はかなり進歩しています。私たちの貴重な財産…社会組織や人間性を守るには、理性的な思考をもってください。もしそれができなければ、本当に“ペスト”が勝利することになるでしょう。

学校で皆さんに会えることを、心待ちにしています。（以上）

過去、日本でも伝染病（コレラ）が蔓延している。当時コレラは、原因も有効な治療法も一切分からず、発病から三日もすれば生命を奪っていく未曾有の急性伝染病であった。

文政5年（1822）、西日本を中心に初流行。続いて安政5年（1858）には、長崎に来航したアメリカ軍艦によって大流行。維新时期には一時的に鳴りをひそめたが、明治10年（1877）、西南戦争の戦地から帰郷する兵士に乗じて全国に広がった。西南戦争で生き延びたのに、コレラで力尽き、郷里に帰れなかった兵士も多数いた。

『都城島津家日誌』に「明治十年十月六日 晴 此比流行コレラト云者有之、鹿児島其他大流行」とあり、その猛威が都城にも伝えられている。

これ以降、コレラは数年おきに大流行し、全国での大きな波は7回以上も記録に残っている。しかし、結果的にコレラに対する持続的な対応が、衛生システムの整備を促した。コレラが「衛生の母」と称されるゆえんである。明治時代、コレラに打ち勝つために、我々の祖先が生活様式を変えたように、これから、「新しい生活様式」を、我々も手に入れなければならない。

私たち教育に従事する者は、スキラーチェ校長先生のように、過去に学び、真実を見つめ、理性的に行動することの大切さを、今一度学び直し、子どもたちに伝えていかねばならない。最大の危機は、私たちの社会生活や人間関係が毒され、人間らしい行いができなくなることだ。命や愛、友情や自然など、本当に大切なものは何か、私自身、理解する機会になるかもしれないと感じている。

「例年どおり」と「危機管理」

川南町立多賀小学校 甲斐伸明

元号が平成から令和に変わり、令和2年度がスタートし、いよいよ教職の最終年度を迎えることとなった今年、宮崎県校長会広報紙「会員コーナー」の執筆依頼があった。区切りの年でもあり、お引き受けすることにした。

そこで、春らしい明るい話題を探したのだが、今この時、これまでの教職経験がまったく参考にならない「例年どおり」が通用しない、それこそ想定していなかった事態となっている。危機管理に「もし」、「たら」は厳禁！！と言われるが、もし、このまま1学期間学校が再開されなかったら、夏休みは？土曜授業は？9月入学への制度変更、教育課程の再編成など、考えられることは数知れず…。各校長先生方も苦慮されつつ、子どもたちの安心安全のために、学校の管理運営に努めていらっしゃるのと御拝察いたします。

思えば、印刷物一つをとっても、昭和の学校現場では、皆が日常の印刷物を鉄筆とガリ版刷りで作成していた。それがやがて、ボールペン原紙、ワープロ、パソコンへと進化を遂げた。多くの文書がデジ

タル化され、膨大な量の情報がネットを通じて送付され、その中から取捨選択することが求められる。進化スピードの何と早きことかと思う。今回の新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、学校が臨時休業中、世の中では多くの企業でテレワークも導入されたと聞く。それに伴い、学校現場でも教師自身はもとより児童生徒も、家庭学習により一層デジタル環境が必要であると感じさせられた。日々一刻と状況は変わっている。

それなりに年齢を重ね、昔を懐かしく思うようになったが、これまでも多くの変化の波に揉まれながらの教職であったと感じさせられる。

「不易と流行」と言われ、不変と思われていたことの多くが、変化を遂げている（ように見える）。何年か先に、どう思うのだろうか。



教職40年目に思う

高原町立広原小学校 西村さと子

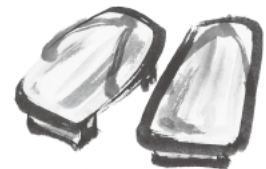
1980年からの39年間に世の中では様々な災害や事件が起きた。阪神淡路大震災、地下鉄サリン事件、9.11アメリカ同時多発テロ事件、口蹄疫の発生と終息宣言、新燃岳大噴火、東日本大震災、・・・その時の映像が流れると、当時担任していた子どもの顔や同僚との会話、あの頃の出来事など鮮明に思い出すことができる。

そして、40年目となる2020年。これまで経験したことが無い、子どもたちの登校しない年度末と新学期スタートとなった。3月の臨時休業が始まった頃は、日頃できない作業や教材準備を進めて、子どもたちを迎えようと考えていた。しかし、4月、5月と長期化すればするほど不安になり、子どもたちだけでなく職員の「命を守る」ことを考えることが優先され、それができるのか責任の重さをひしひしと感じる日々が続いた。

そんな時、「お店を閉めます」と連絡が来た。その人は、教職について2年目に受け持った児童の保護者で、学級委員長をしていただいた方である。この一報は、新型コロナウイルス感染症がたくさんの人

の人生や生活に影響を与えていることを実感させられた。

臨時休業が続いて子どもたちは、「学校に早く行きたい」「みんなと遊びたい」と言ってくれていることはありがたいが、様々な影響を受けていることだろう。一人では学習がうまく進まない、人と接することが少ない、体を動かすことがほとんど無い、給食が無くて栄養が偏る、ストレスをうまく発散できないなどあるだろうが、学校が再開したらこれらを補わなければならない。3月末までは、未来を羽ばたく子どもたちの健全な心身を育むことに力を注がなければならない。「自他の命を大切にする児童の育成」を学校経営の柱にして3年目。ピアサポート活動を職員と共に学び実践しながら、新型コロナウイルス感染症の拡大防止の取組が「自他の命を大切にする教育」に繋いでいけることを期待している。



温故知新

都城市立小松原中学校 日 淺 雅 道

4月の定期人事異動で、本校に赴任した。折しも世界がコロナ禍の中での異動となり、始業式や入学式を無事に終えることはできたが、このように臨時休業が続く中、改めていろいろなものを見直す機会となった今日、校歌の歌詞を今更ながらに活字で読んで見た。『仰げば霧島いや高く 清き流れは大淀の 歴史は薫る三州に 平和の鐘は鳴り渡り 朝日に映ゆる 小松原』「ん、『三州』って何だっけ？」都城は、平安時代に「島津荘」という大荘園があった場所で、源頼朝が平家を滅ぼし、惟宗忠久（これむねただひさ）をこの地の地頭に任命したことによって、島津家発祥となった。都城市では、島津発祥まつりを平成20年から開催している。この島津氏の時代、領地統一にしのぎを削っていたころ、薩摩（薩州）と大隅（隅州）、そして日向（日州）の一部の3地域を三州と呼んでいたようだ。

本校は、昭和22年、大王中学校として開校し、2年後には学校区再編により現在の校名となった。校区内には小松原町がある。これも鹿児島市に小松原という地名があり、縁を感じる。改称当時の記録

によると、生徒数1,562名、32学級、教職員50名とあり、今では考えられないほどのマンモス校であった。

世情が変わり今日から分散登校が始まった。この小松原中学校の30代目校長として、毎日29名の先輩の写真に見守られながら（時には叱咤激励をいただきながら）、いまだ先が見通せない状況の中、活気に満ち、前向きでバイタリティあふれる素晴らしい32名の先生方とともに地域のお力をお借りしながら244名の生徒たちの健全育成に、日々、試行錯誤しながら尽力しているところである。元プロ野球選手のイチロー氏が『びっくりするような好プレーが、勝ちに結びつくことは少ないです。確実にこなさないといけないプレーを確実にこなせるチームは強いと思います。』と語ったように、私なりの「チーム小松原」をめざしていきたいと、改めて強く思う。



支 会 だ り

< 都 城 支 会 >

都城市立明道小学校 永 野 高 行

都城支会は、都城市校長会と三股町校長会で組織されており、都城市の56校（小学校36校、中学校18校、県立中学校1校、小中一貫教育校1校）、及び三股町の7校（小学校6校、中学校1校）の計63校で構成されている。

本年度の支会運営は、新型コロナウイルスの影響冷めやらぬ中で開催した4月2日の都城支会総会（小中分散開催）から始まった。新たに転入・採用となった18名の校長を迎え、新学習指導要領の完全実施に向けた新しい時代に対応する教育の充実を図るとともに、組織力に基づく校長としての資質と指導力のさらなる向上に努めたい。

今年度の取組として、年2回の小中合同研修会とその間の年3回の小中学校別（学校訪問）研修会、夏季休業中の退職校長会との合同懇話会、2月の宮崎県教育研究会との共催で実施する日本教育会宮崎支部との地区研修会、さらには全校長で担う教科部会や各種委員会等の会長・委員（長）としての運営

等を計画している。支会刊行物としては教職員録、研究集録、べぶ通信（会員随想録）、講師名簿等があり、有効活用を図りたいと考える。

しかし、今年度は言うまでもなく新型コロナウイルス対策という出口の見えない喫緊の課題に、行政・学校・家庭・地域が一体となり取り組んでいる。本校長会にも学校教育の根幹である「児童生徒の命と健康・安全」を守るために、計画の変更・自粛・延期・中止もやむを得ない状況の中での迅速かつ適切な判断と連絡体制、機動力が求められる。本年度はそのための一方策として無料通信アプリを活用した緊急時連絡体制を再構築した。まさに、市町教育委員会等と連携した校長会としての結束力・組織力が問われている。



〈 児 湯 支 会 〉

学びの丘 上新田学園（新富町立上新田小・中学校） 土 持 光 司

児湯支会は、高鍋町、新富町、木城町、川南町、都農町の5町で構成されており、五つの自治体の集合体というのは、県内11の支会の中で最も多い。5町には、小学校12校、中学校7校、小中一貫教育校が田園の里 新田学園と本校の2校で、校長数は21名、これは日南支会と同数である。なお、今春7校で校長のバトンが引き継がれている。

本支会は、県校長会の活動方針に則り、これまでの歴史を踏まえ、会員相互の連携を密にし、望ましい学校経営を推進し、教育の充実・振興を図ることを目的として設置されている。

昨年度は、各町持ち回りで、年5回の研修会を計画し、前半に全体研修会、後半に小中別研修会を実施した。全体研修会では、開催町教育長から心温まる激励の挨拶を賜り、身が引き締まった後、県校長会理事会や各種委員会等からの報告を受け、情報の共有化、指導方針や指導内容の周知徹底を図った。小中別研修会では、九州及び県大会での研究内容の

検討や各学校が抱える喫緊の課題についての情報交換等を行いながら、組織マネジメントの向上を図ってきた。

例年、本支会の総会に当たる第1回目の会合は、4月に教育事務所が主催する管内校長会後に、別途会場をお借りし実施してきた。しかし、本年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、管内校長会が中止となり開催できず、年度当初の確認事項、総会資料、会計報告等は、校長間のメール送受による書面承認となっている。

なかなか思うようにいかない本年度である。子どもたちのために何ができるか、本当に頭と心を悩ましてくれる。明日になれば、状況が一変してしまう日々の連続であるが、校長相互の絆を深め、支会の「創意と英知」を結集し、納得解を追い求めていきたい。



〈 西 諸 支 会 〉

えびの市立飯野小学校 唐仁原 幸 吉

本年度は、新型コロナウイルス感染症対応で、様々な研修会が中止となっているが、一日も早く収束に向かい、平常の学校生活が送れるようになることを祈るばかりである。

西諸支会は、小林市、えびの市、高原町の2市1町の小学校21校、中学校15校（うち、小中一貫校1校）の校長35名で組織されている。「西諸は一つ」を合い言葉に、情報と意識の共有を図りながら、学校経営の推進に努めている。

本支会は、例年2回の研修会を行っており、昨年度は、第1回目の研修会では、「管理職に求められるもの」の演題で、当時の南部教育事務所、島崎善真理所長に講話をお願いした。「次期教育振興基本計画」「働き方改革」「OJT」「コンプライアンス」の4つの観点で、教育の質の向上を基盤とした具体的な取組をもとに、危機管理意識をしっかりとつことや信頼ある学校経営の重要性について指導していただいた。「環境が変わっても、教職員の意識が変

わらなければ何も変わらない。」と言われた言葉のとおり、先を見て、全体を捉え、本質を見極めて、新しい教育の在り方に対応した実践に取り組んでいきたい。

第2回目の研修会では、「校長として学校経営上心がけたこと、そして、退職後の学校や地域との関わり」の演題で、元小林市立南小学校長 福留健一氏に講演をお願いした。校長時代の様々な具体的な実践例をもとに、熱く楽しく講話をしていただいた。いろいろな出会いや関係を大事にし、高い目標に向かって常に努力されている姿がとても印象に残った。考えるだけでなく、即行動に移すことの大切さを学ぶことができた。

今後とも「西諸は一つ」、新型コロナウイルス感染症に負けずに、一丸となって令和2年度の教育活動を充実したものにしていきたい。



編集後記

3月初めの全国一斉休校から約4か月。未曾有の事態に、私たち校長は、状況に対応した判断を求められる毎日が続きました。3密、ソーシャルディスタンス、咳エチケット等の新語はもはや全世界に定着し「新しい生活様式」が求められています。ここまで短期間の、なおかつ劇的な変化を誰が予測できたでしょうか。「変化の激しい時代」とは、教育界でよく言われる言葉ですが、正に「激しい変化」を地で行く状況がこの数か月であったと言えるでしょう。

そんな中学校長会広報紙212号をここにお届けできたことにほっと胸を撫で下ろしています。212号も続いてきたこの広報紙は、コロナの「流行」とは対極の「不易」であり、連綿と続く宮崎県校長会の誇りと言っては言い過ぎでしょうか。原稿を寄せてくださった都城市教育長児玉晴男様をはじめ7名の執筆者の皆様、集約・校正に当たってくださった広報委員の皆様にご心より感謝申し上げます。